



ご挨拶

第33回日本産婦人科・新生児血液学会
学術集会 会長 細野 茂春
自治医科大学附属さいたま医療センター
小児科・周産期科 教授

このたび、第33回日本産婦人科・新生児血液学会学術集会長を拝命いたしました。2023年6月9日（金）～10日（土）の2日間の日程でさいたま市浦和区にある「埼玉会館」で開催致します。歴史あるこの学術集会を開催する機会をいただき大変光栄に存じます。

特別講演1では最近医学系論文でも解析手法として取り上げられるようになってきたAIについて日本大学理工学部応用情報工学科、細野裕行 教授に「深層学習とビッグデータでできること」を、特別講演2として浜松医科大学産婦人科家庭医療学講座、杉村 基 教授に「産科領域の貯血式自己血輸血指針と鉄補充への展望」をそれぞれご講演いただきます。

また、教育講演1では自治医科大学生化学講座病態生化学部門、大森 司 教授に「周産期診療に役立つ血栓・止血のイロハ」を、教育講演2では内科的治療の中心である薬物治療について周産期での特殊性を踏まえて日本大学薬学部臨床薬物動態学研究室、辻 泰弘教授に「臨床薬理学を基盤とした周産期の薬物投与設計」をそれぞれご講演いただきます。

企画シンポジウムとして「小児の輸血療法」、「妊娠高血圧症候群関連DICの管理」、「産科危機的出血とフィブリノーゲン」の3題を、共催セッションとして「新生児・乳児における先天性血友病Aの治療実態と課題」、「産科危機的出血でのフィブリノーゲンの補充」の2題を企画しました。

2022年の人口動態統計出生数が80万人を切る状態となり、しばらくは出生率の回復は見込めないとの悲観的な予測も出ています。研究には基礎研究と臨床研究がありますが臨床研究は倫理審査などの手続き等で若手医師の研究のハードルを上げています。さらに対象となる妊婦・新生児の数の減少は研究対象のリクルートにも影響を及ぼしていくことになります。本学会でのテーマは「血液のおもしろみを伝えよう」としました。多くの方々に会場に足を運んでいただいて直接ベテランの先生方から若手医師に周産期における血液学のおもしろみを伝えていただきたいと思えます。また、若手医師の方は先人達の研究を振り返り未知の研究領域を開拓して世界へ情報発信していただくきっかけとなれば幸いです。

会場のあるさいたま市浦和区は江戸時代から鰻が有名で多くの名店があります。隣の大宮区に足を延ばせば2,400年以上の歴史を持つと言われる武蔵一宮氷川神社、海外からも注目されている盆栽の聖地である大宮盆栽村や鉄道ファン必見の鉄道博物館があります。

会員の皆様に現地に足を運んでいただき、満足いただけるよう当センター小児科・周産期科医局員一同誠心誠意、準備を進めてまいります。

令和5年6月に埼玉の地で会員の皆様にお目にかかれることを楽しみにしています。